

成果報告書

記入日

2024年 1月 20日

フリガナ (キムラリョウコ) 氏名 木村諒子	渡航先国名・地域 大韓民国・ソウル	所属機関 ソウル市立大学
研究テーマ：韓国バラエティ番組におけるジェンダー表象		
研究期間：2023年2月～2023年12月 (11ヶ月)		
研究成果 (概要) 韓国での研究は①映像と文献資料の収集、②研究内容に関連した実践的な活動の二本柱ですすめた。資料収集と並行して、研究内容に関連した実践的な活動も行った。また留学先の大学の授業で、韓国語と韓国の社会や歴史全般について学んだ。これら実践で得られた知見を分析に活かす予定である。		
研究成果 (詳細) 自分が留学先に選んだソウル市立大学は、交通の便がよく、交流したり、情報を集めたりするのに適していた。そのため留学中は大学外に赴き、韓国の実社会と関わりながら研究を推進した。韓国の歴史や社会について実感を伴いながら知ってこそ、バラエティ番組の内容や文脈を理解できるだろうという思いも強かった。滞在中は、映像と文献資料の収集をしつつ、研究の推進に役立つような場所に足を運ぶ日々を過ごした。このように韓国では、①映像と文献資料の収集と②研究内容に関連した実践的な活動、の二本柱で研究を推進した。この経験を通じて得た知識や実感を基に、2024年度に日本の所属大学にて研究結果をまとめる予定である。 ①映像資料の収集には、「WATCHA」と「NETFLIX」の2つの映像配信サービスを利用した。「WATCHA」は韓国発の映像配信サービスである。様々なバラエティ番組を見て注目したのが「推理系バラエティ番組」というジャンルである。研究計画の時点で着目していた『女子高推理班』の他、『悪魔の計略～デビルズ・プラン～』、『クライムシーン』など、近年人気の番組が多い。このジャンルの番組は、いわゆる笑いを求めるだけのバラエティ番組とは一線を画す。このジャンルの番組の特徴のひとつとして、ドラマでもドキュメンタリーでもない曖昧な現実感があげられる。番組の多くは、架空の場所や事件を題材として扱う。そして出演者が架空の世界観に入り込み、推理や謎解きゲームをおこなう。出演者のキャラクターやセリフ、そして話の展開は予め決められてはいない(というふうに出演されている)。出演者自身の知恵や体力を用いて、ゼロから謎を解いていく必要があるのである。また、出演者が課題を乗り越える過程で、出演者の性格や能力が浮き彫りになる。さらに出演者が生身の人間として持つ知識やこれまでの人生経験が、番組の展開に影響を与えることもある。このように、架空の舞台設定であるものの、出演者は現実を生きる人間としての「リアルな」性格や能力を発揮しなければいけない。こうした演出が、ドラマともドキュメンタリーとも判断できない曖昧な現実感を作りだしている。こうした独特の世界観のなかで、ジェンダーはどのような意味を持つ(もしくは持たない)だろうか。この着眼点から、今後の分析をすすめることを決定した。		

映像の視聴と並行して、韓国社会の実情に迫りたいという思いで、いくつかの場に足を運んだ。ここでは特に本研究に貢献する成果があった、「ソウル女性会フェミニスト大学生連合サークル」での活動と「両性平等メディアフォーラム」について書く。

訪韓後すぐに参加したのが「ソウル女性会フェミニスト大学生連合サークル」、通称「ソペデヨン」の活動である。ソウル地域の大学生を構成員とするサークルで、フェミニズムに関心を持つ学生が集まる。週に1回程度の定期集会、フェミニズムについての勉強会、ほかにも裁判傍聴や性暴力根絶を目指すデモ、といった活動を行う。もともと「ソウル女性会」という世代を問わず参加できる団体があり、学生団体のソペデヨンはこの特別支部という位置づけで2016年に活動を開始した。大学のある地域によって3つの支部に分かれており、自分が主に参加していた東部支部には計10人ほどの参加者がいたと思われる。

ソペデヨンの活動のなかで特に印象深かったのが、「フェミニズムでメディアを読む」というテーマの勉強会である。ウェブドラマを視聴し、性差別的な描写について批判的な分析を試みるという会であった。ウェブドラマとは、YouTubeなど、インターネットを介して配信されるドラマのことである。動画の長さが10~30分ほどで、比較的短いのが特徴である。韓国は、ウェブドラマの発信地として有名な場所の1つである。影響力を持つウェブドラマに対し、フェミニストとしての批判を試みるのが会の目的であった。会の最初に、どのような描写が批判の対象となりうるかについて書かれたリストが配られた。このリストには「1. 性的固定観念」「2. 性的対象化」「3. 性暴力」と3つの観点が書かれている。3つの観点ごとに、さらに細分化された項目がある。例えば「1. 性的固定観念」という観点には、「1-1) 性役割」「1-2) 美貌(身体)」「1-3) 属性」「1-4) 特定性に対する否定的態度」という4つの項目がある。そして、この4項目それぞれに具体的な例が書かれている。たとえば「1-1) 性役割」の項には「①関係において女性は受動的な役割」「②関係において男性は能動的役割」「③女性的な女性強調(家事や養育、ケア労働は女性の役割または協調)」「④男性的な男性強調(兵役の有無、酒量、力、筋肉、経済力、家族扶養など)」「⑤その他」と書かれている。この例に当てはまる描写があれば、批判の対象になりうるということである。会ではこのリストに書かれた項目を参考にしながら、ウェブドラマの映像に対する批判を試みた。事例として見たウェブドラマは学校を舞台にした平易な内容で、何気なしに見れば、批判をすることも難しいと思うほどであった。しかし会の参加者たちは、わずかでも性差別的な意識がにじみ出れば指摘しようという積極的な姿勢を持っていた。その様子を見て、韓国のフェミニストたちの問題意識の高さを感じた。また前述のリストの内容には、「兵役」など、韓国社会だからこそ指摘される観点もある。韓国社会ならではの観点について知れたことは、韓国のバラエティ番組を分析するうえで非常に有効である。

ソペデヨンは、「ソウル女性会」や他団体とも協働して様々な社会的活動を行っていた。2023年5月17日には、江南駅9、10番出口にて「江南駅女性殺害事件7周忌追悼行動」があった(p.5、写真1)。江南駅女性殺害事件は、2016年5月17日未明に江南駅近辺のビルの男女共用ビルで起きた殺人事件である。犯人の男性が女性を無差別に狙った犯罪(女性嫌悪殺人)であったことが明らかになり、韓国でフェミニズムの熱が高まった要因の1つといわれている。この事件の追悼活動が、事件発生日と同じ日に事件現場付近で行われた。自分は大学の授業との兼ね合いで撤収風景しかほとんど見ることはできなかったが、それでも現場に活気が満ちているのを感じた。追悼活動では、メッセージが書かれたポストイットの収集や合唱が行われたということだ。近くには、拡声マイクを持ち「フェミたちは死を利用するな」と書いた看板を立てるなどして対抗する男性がいた。しかし追悼集会に集まった人々たちからは、自分たちの活動の意義を信じるという、強い意志が伝わってきた。

こうしたソペデヨンの活動に関する連絡は、カカオトーク（メッセージアプリ）のグループトークを通じて主に行われた。グループトークには、ソペデヨン外の活動含め様々な社会的活動への参加の誘い、社会情勢や事件に関する情報の共有、そして参加者たちの意見表明などがよく送られていた。このように、ソペデヨンに集まった学生は自らの活動や意見を共有しあう。そしてこの場所から、自分の活動の場やネットワークをさらに広げていくこともできる。このことから、ソペデヨンは韓国の若い世代のフェミニストが集まる拠点の1つとして、重要な役割を果たしている印象を受けた。

2023年9月には、韓国両性平等教育振興院が主催した「2023 両性平等メディアフォーラム」に一般聴衆として参加した（p.6、写真2）。フォーラムを主催する韓国両性平等教育振興院は、国家行政機関である女性家族部の傘下にある公共機関である。両性平等に向けた教育事業を主に行っている。また民間団体と専門家と協力し、大衆文化を「性認知的」観点で分析し、両性平等メディア教育ならびにキャンペーンなども推進しているという。両性平等メディアフォーラムの開催は2023年が4回目である。今回のフォーラムの主題は「メディアトレンド変化と両性平等」。コロナ禍以降いっそう加速度的に変化したメディア環境に着目し、変化のなかでどのようにメディアの理解と解釈をするかについて共有しあうという趣旨であった。フォーラムは主題発表、総合討論の二本立てで行われた。昨今の多様化するメディア環境に即し、ウェブ小説、YouTubeのショート動画、OTTコンテンツ、そしてバラエティ番組など、多種多様なコンテンツが発表と議論の題材になっていた。

主題発表のなかで特に印象深いのが、梨花女子大学コミュニケーションメディア研究所の研究者による「韓国バラエティ番組での女性：関係性とキャラクターを中心に」という題の研究発表である。2022年1月から2023年6月の間地上波、総合編成チャンネル、ケーブルテレビで放映された284編のバラエティ番組を検討し量的分析と質的分析を遂行した内容だ。研究の背景として、「最近の国内バラエティ番組において女性芸能人たちが可視化されるなどの変化の様相」が説明されている。近年のバラエティ番組の変化について、韓国の研究者たちも注目しているということである。

研究発表で取り上げられていたのは「ピョンピョン地球娯楽室」「Undercover Food Fighters（未邦訳、英題）」「ボールを蹴る彼女たち」の3番組である。これらの番組を、「出演者/制作陣たちの関係性」「女性芸能人たちの専門性と役割」、そして「女性出演者たちの身体イメージとジェンダー」の着眼点から分析する内容であった。「関係性」「専門性と役割」そして「身体」という複数の異なる観点から、女性芸能人の立場を正確に捉えようとしているアプローチが印象的である。複数の観点からアプローチする複眼的な分析だからこそ、女性芸能人たちの立場や他の演者、制作陣との関係性が鮮明に浮かびあがってきている内容であった。本研究においても、こうしたアプローチを採用したいと考えており、どのような観点を導入するかの詳細は今後の課題として検討中である。

上述の通り、韓国での研究活動は①映像と文献資料の収集、②研究内容に関連した実践的な活動の二本柱ですすめた。①を通じて「推理系バラエティ番組」というジャンルに着目する方針を決めた。また②を通じて、韓国のフェミニズム、ジェンダー、そしてメディアをめぐる実相に迫ることができたと考えている。①②の研究活動のほか、留学先の大学では韓国語、韓国の社会、そして歴史について学ぶ授業を履修した。授業と実践を通じて韓国語の力を伸ばすことができ、2023年12月には韓国語能力試験（TOPIK）で最高級の6級を取得した。今後日本では韓国での研究活動の成果をベースに、より詳細な分析と検討を行う。

留学中の生活・研究でのトピックス

当研究と内容的に直接の関連はなかったものの、印象深かった講演がある。高麗大学の人権週間に即して行われた、「女性ホームレス、貧困とジェンダーの交差点で」という講演である。ホームレス支援団体に属する活動家が、女性のホームレスをめぐる現状について話していた。住居の貸し出しなど公的な制度もなくはないのだが制度として全く不十分で、そもそも支援にたどりつけない人も多い。また、貸し出された住居のセキュリティや周辺環境が悪いケースもある。治安の悪さを考慮し、夜はあえて部屋で寝ずに街を歩き続ける高齢の女性もいるという。貧困やホームレスが社会のなかで不可視化される。そして支援の過程でも、女性であるがゆえの困難を経験する。女性のホームレスが何重にも痛みを強いられる現状は、日本社会においても他人事ではない。ソウルで暮らしていると、昼に駅の地下街の端に段ボールを敷いて寝ている人や、夜に大きな荷物を持って歩く高齢者の姿をしばしばみた。その人たちが全員ホームレスなのかどうかは分からないが、自分を含め、声をかける人はまずいない。支援する民間団体が存在しているという事実が一縷の望みであるように思えた。

交換留学先の大学では、授業のほかに、韓国の学生に日本語を教えるチュータリング活動に取り組んだ。週に1時間、学生5人に日本語を教える活動だが、決まった形式はないので、最初はどう教えればいいのか苦心した。特に前学期は初級クラスを担当したので、ひらがなを一から説明する必要があった。韓国語でひらがなの書き順などを説明するのはかなり難しかったが、韓国の友だちたちはとても一生懸命に勉強してくれた。自分にとっても韓国語を話す機会となり、よいかたちで言語交換ができた。

学外では趣味の一人旅も満喫した。韓国で驚いたことのひとつが交通費の安さである。おかげで行きたい場所に躊躇なく行くことができた。空いている時間を見つけて、春川、濟州島、釜山、江陵、光州などの観光地をおとずれた。なかでも、夏休みのはじめに訪れた春川の壮大な自然が記憶に残っている。

そして韓国では、大学生として何気ない日常を送れたことが幸せであった。日本の大学では入学と同じタイミングでコロナ禍になり、実家でパソコンに向かう日々が続いた。しかし学部3年時にコロナ禍が落ち着き、交換留学の機会に恵まれた。こうして奨学金を給付していただくこともでき、これ以上ない条件のもとで韓国に飛び立った。韓国では新鮮なことばかりで、非常に楽しい時間を過ごした (p. 6、写真 3)。

今後の社会貢献

留学前は、大学卒業後に大学院に進学して研究を続ける予定であった。しかし留学先での経験を経て、進学と違うかたちで社会貢献をしたい気持ちが高まった。そのため大学院に進学せず、就職予定である。

進路を変えることにした一番の要因は、韓国で社会活動家たちの姿を間近でみたことである。交流した活動家の多くは、重苦しい現実に向き合っているにもかかわらず、いつも前向きなエネルギーに満ちていた。なぜそんなに精力的に活動ができるのかと聞くと、しばしば「楽しいから」という答えが返ってきた。彼女たちは本気で社会を自分の行動によって変えられると信じている。そして信念に基づいて実践を続けている。その姿が自分にはとても眩しくうつった。自分はこれまでフェミニズムや女性差別といった問題と向き合うなかで、精神的につらいと思うときが多かった。韓国の活動家たちがいうような「楽しい」という気持ちを持ったことはない。しかし韓国での経験を通じて、少し前向きな気持ちが生まれた。韓国のような爆発的な勢いはないかもしれないが、日本社会もまた、自分たち一人一人の行動と意識によっていくらかでも変わる可能性があるということに気づいたからである。そのため今後は、「社会をよりよい方向に変えたい」という前向きな意識を持つ一人として、仕事も含めて活動の幅を広げる。そして留学で得られた知見やネットワークを、表象やジェンダー課題に関連した社会活動に還元する予定である。

写真1：2023年5月17日、江南駅女性殺害事件7周忌追悼行動の現場にて。「誰も自分たちの前進を遮ることはできない」と書かれている。

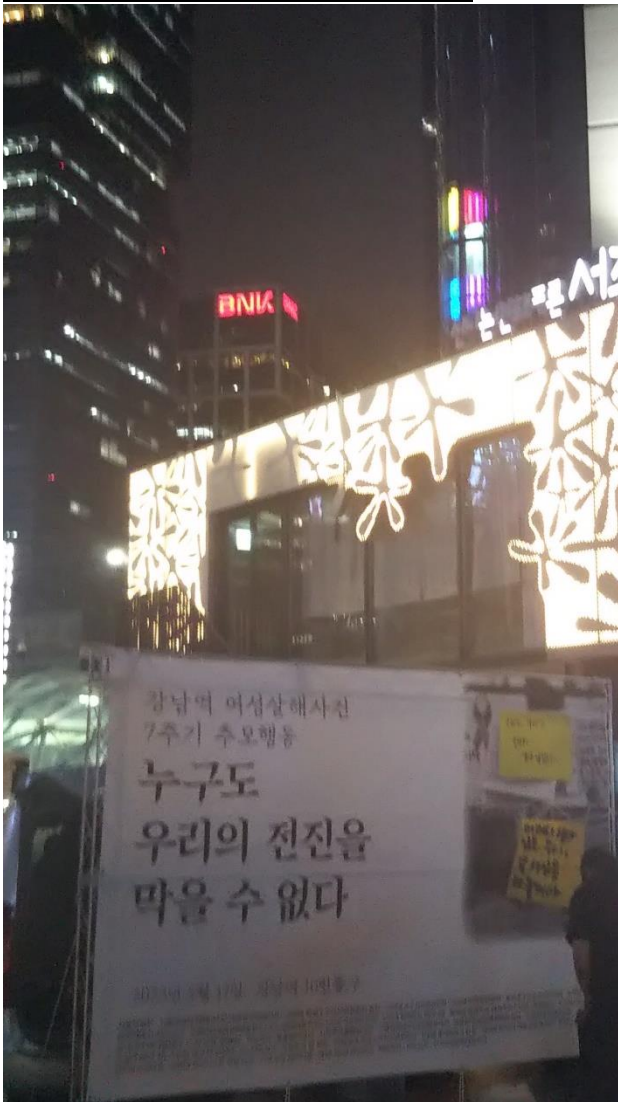


写真2：「2023 両性平等メディアフォーラム」の看板。ビルの貸会議室のような場所で行われた。当日はリアルタイムの映像配信も行われていた。

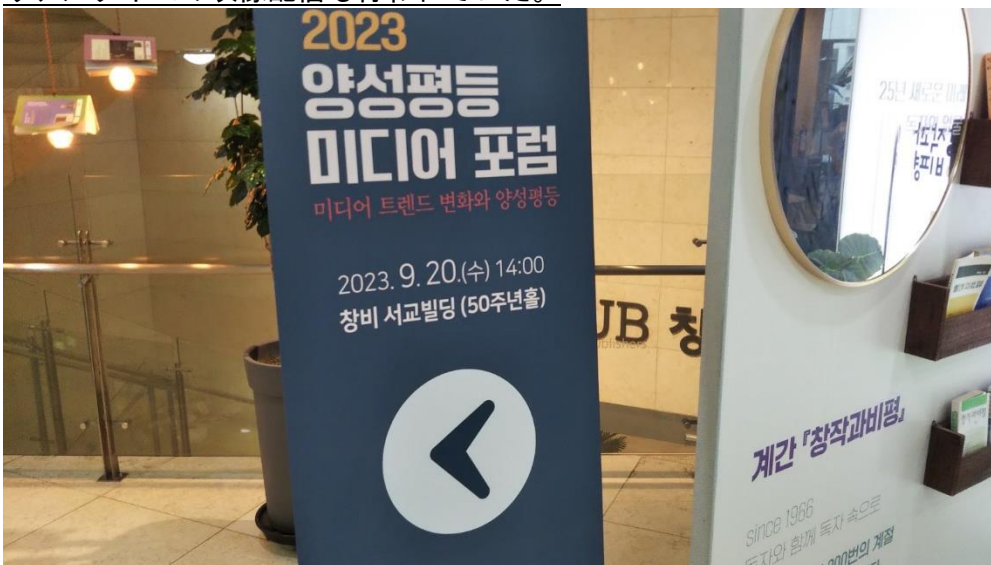


写真3：帰国前日。大学近くの馴染みのスーパーマーケットの前で。

